

音楽青葉会創立65周年記念チクルスPartV 静岡児童合唱団演奏会 ～源流から大海へ～

4月12日(日)

静岡音楽館AOI

イースターの礼拝には行かれませんが、午後2時ごろ家を出て、静岡までドライブしてきました。静岡児童合唱団特別演奏会があるということで、これまいたても立っていられず馳せ参じたというわけです。創立65周年、創立当時5歳だった児童が今は70歳! 当たり前か…。この合唱団の初演した曲は枚挙に暇がありませんが、今や世界中で歌われている小倉脩『ほたるこい』を含む『東北地方のわらべうたによる九つの無伴奏女声合唱曲』や間宮芳生『三色草子』は、合唱好きならばすぐに思い付く曲ではないでしょうか。

例によって開演間際に会場に到着した私、日本合唱指揮者協会の仲間ということもあり、戸崎裕子・文葉親子の計らいで特等席に案内していただくと、なんとお隣が今とときめく作曲家の信長貴富氏! 軽く会釈しておりますと、まもなく美しいグレゴリオ聖歌の導入から演奏会が始まりました。

会場から歩きながらの歌唱は響きのまわりも視覚的にも楽しめるのですが、山台の上まで行くとやはり足音は気になるかなあ? 掛け合いの合唱では音響を考えてさまざまなフォーメーションの工夫がなされたのですが、見た目のデメリットほどの音響効果があったとは思いませんでした。

H

グレゴリオの美しい響きに続いて登場されたのは、この合唱団とは35年もお付き合いで、作曲・指揮・音楽史研究・音楽評論とマルチにご活躍の、日本音楽界の重鎮・菅野浩和先生でした! 復活祭のこの日のために自身が選曲された「受難と復活の聖歌から」と題されたステージ。まだ指揮者という職業が認知されていなかった時代のビクトリアらの作品から、まさにポリフォニーのお手本と申しますか、「当時はこうして合唱団をリードしていたんだよ!」というような見事な指揮で聴かせてくださいました。

続くバレストリーナの聖母マリアの受胎感謝の歌『マニフィカート』でも、実にスタイリッシュかつ、この時代のアンセムの使命でもあったであろう「洗脳能力」を十二分に踏まえ、会場の響きを巧みに捉えた素晴らしい演奏を引き出しておられました。礼拝に

うかがえなかった私自身、余りある恵みを感じたことと喜んでおりました。すると隣で曲間ごとに唸ったり呟いたり溜め息をついたりしておられる方が…そう、信長氏です。最終ステージでのご自身の曲の演奏への期待は最高潮といったところでした。

第3ステージではNHK交響楽団首席クラリネット奏者の磯部周平氏的美しくも華麗なクラリネットソロが加わり、菅野先生ご自身の作品であるア・カベラ児童合唱『小さい星座』ではトライアングルとシンバルも加わり、楽しく、聴く者の心を豊かにしてくれる演奏となりました。音響の良いホールだけに、頭声での歌唱でやや歌詞が聞き取りにくくなるものの、足音を効果的に使った『あめがやんだら』の歌唱は心に今も強く刻まれています。『春の女神』ではクラリネットとコーラスの声部が実に美しく溶け合っていました。美しい声と正確なピッチの期待できる合唱団にはぜひ取り上げてほしい作品集です。

H

さて続くステージは、私が今回静岡に足を運んだ一番のお目当て、戸崎裕子先生^{みづの}の登場です! この団の創立者・故戸崎舜裕先生の「健全な子どものための歌を作りたい」という信念から生まれた「NHK静岡ラジオこどもの歌」の数々が、娘で2代目の裕子先生の指揮と、孫で3代目指揮者の文葉さんのピアノ伴奏により、幼児部のお子さんたちでしょうか、愛らしい声で披露されました。

新実徳英氏が「白いうた青いうた」シリーズの中で常に「3世代が共に歌える歌を…」と唱えておられますが、ここではそんな夢のような出来事がごく自然に、しかもハイレヴェルな演奏で実現しているんですね。幼い子どもたちにまで、しっかりとした発声と正確なピッチを身に付けさせておられるのには驚嘆! 裕子先生の指揮は軍隊のように厳格に取り仕切るのではなく、子どもたちがステージ上でも幼児のままでもいられる包容力豊かな雰囲気作りがさすがだし、聴衆にその心地良さを存分に与えてくださいます。それでいてシニアのバレストリーナの歌唱にしっかりつながる要素をすでに引き出し始めていることを、客席にも充分に感じさせてくださるもので、なんだか静岡でもう一度子育てしてみたくなっちゃいましたよ。隣の方の唸り声もますます大きくなるばかり!

そして、それにも増して私を驚かせたのは、次第に演奏に加わっていくOGたちの歌声でした。それまでのサウンドを変質させることなく、響きは豊かに言葉には深みをもたらしてゆくところに、この合唱団、戸崎家の「子どもたちとその音楽をこよなく愛し続けた歴史」をうれしく感じさせていただきました。

H

第3部は日本でも屈指の弦楽アンサンブル奏者をずらっと並べて、セイシャス作曲のチェンバロコンチェルトが、やはり戸崎家の血を受け継ぐ戸崎廣乃さんのソロチェンバロで披露されました。チェンバロそのものの響きがやや地味だったかなあとも思ったのですが、その見事なテクニックと感性によりアカデミックな演奏を聴かせてくれました。

最終ステージはこの素晴らしいアンサンブルの共演を得て、いよいよ、終始私の隣で「素晴らしい!」と連呼しておられた信長貴富氏の編曲された『ヴィヴァルディが見た日本の四季』。スマートかつ的確な指揮は、この日歌手&ピアニストも務められた戸崎文葉さんです。優れた後継者を迎えることのできたこの合唱団が、いや、こうした音楽の在り方が、この静岡の地にいつまでも続いてほしいと願わずにはいられませんでした。

信長氏の編曲はヴィヴァルディの音楽の流れを損なうことなく、巧みに日本の叙情歌を織り込んでゆく手法で、いったい彼の頭の中ではどれほどの曲がチョイスを待っているのだろうか、今度は私が溜め息ばかりでした。『村祭り』の挿入は秀逸! 『ベチカ』の歌唱は深い叙情性と共に胸に迫るものがありました。「僕も絶対やるからね!」と信長氏に声をかけたことは言うまでもありません。

信長氏の「こんなに良い曲だとは思いませんでした」のコメントがおかしくも、この団が65年積んで来られた本物の財産を如実に表わすものだったのかも知れません。教会に行けなかった今年のイースターは、私に本当に特別な意味をもたらしてくれる有意義な一日となりました。

